

社会福祉法人・学校法人 イエス団



イエス団報

Jesus band news

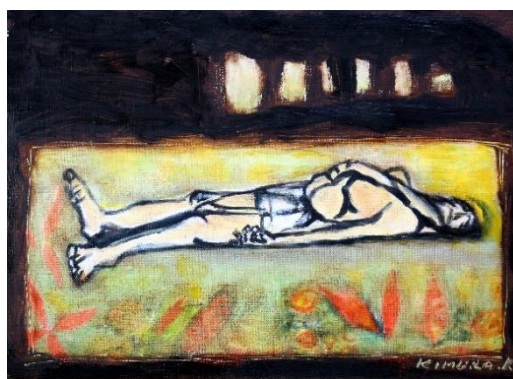
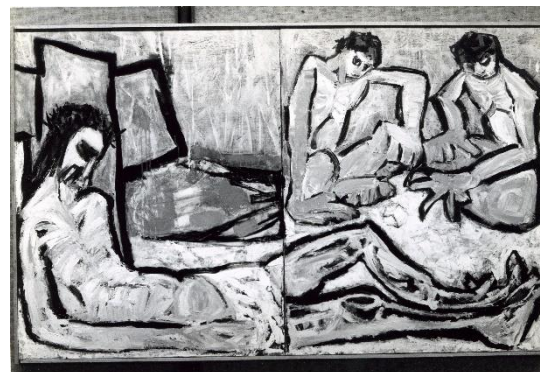
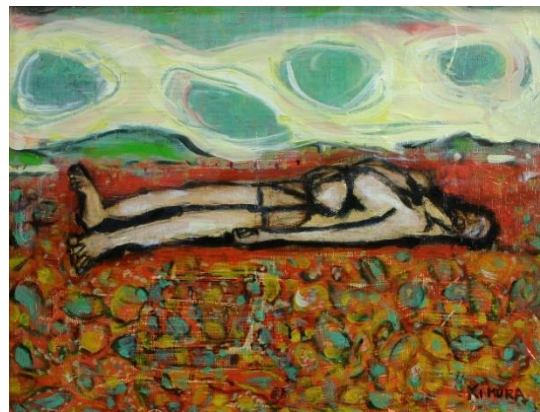
2019/7/16

22

再刊 22 号

- 木村量好 元理事長を偲んで
黒田道郎 理事長
学校法人・社会福祉法人イエス団
- 木村量好のこと
宇野豊 桃陵乳児保育園 園長
あるきはじめの保育(10周年記念誌より)
園だより(2010年3月号より)
- 吾が恩師・木村量好先生
平田義 愛隣館研修センター 施設長
- 木村量好プロフィール
- 木村先生と絵画

発行：2019年7月16日
発行者：黒田 道郎
編集・発行：
社会福祉法人・学校法人 イエス団
〒651-0076
兵庫県神戸市中央区吾妻通 5-2-20
TEL：078-221-9565
FAX：078-221-9566
<http://www.jesusband.jp>
mail to : honbu@jesusband.jp

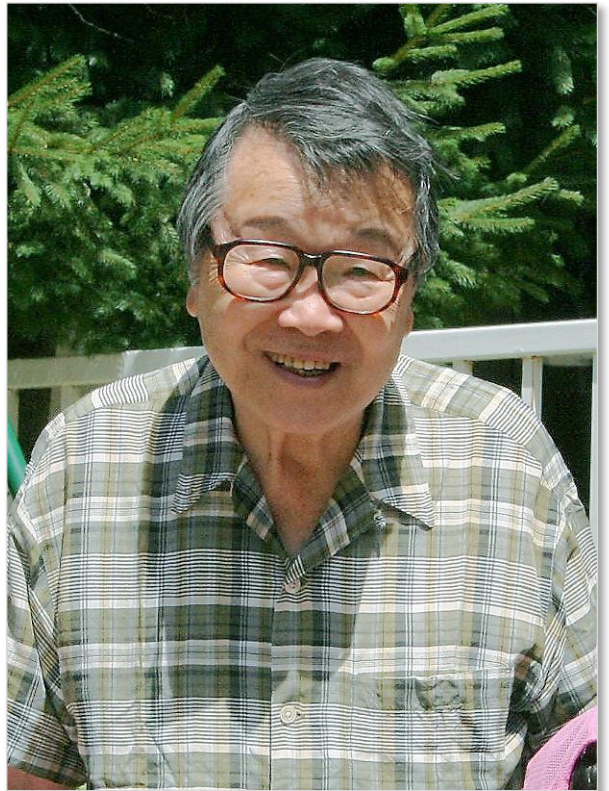


社会福祉法人イエス団
学校法人イエス団 第五代理事長
木村量好先生を偲ぶ

木村 量好

きむらかずよし

- ・ 社会福祉法人・学校法人イエス団
第五代理事長 2004-2009
- ・ 1932年4月29日、徳島県生まれ
- ・ 同志社大学大学院 組織神学専攻
- ・ 2018年10月31日 召天 86歳



「木村量好 元理事長を偲んで」

社会福祉法人・学校法人イエス団 理事長 黒田道郎

木村元理事長（以下先生）が徳島出身であったことを、キリスト教年鑑で目にしていましたが、特に先生に確認することなく過ぎてしまいました。この度木村先生の資料を読み、先生が徳島で生まれ、小松島で行われた賀川豊彦講演会でキリスト教に出会い、徳島市内で開拓伝道されていた小川秀一牧師から薫陶をうけられたことを知りました。そして恩師に感化され牧師になる決意を固め、同志社で学び、卒業と同時に四貫島教会と天使保育園と友隣館で働かれました。徳島を故郷とする私にとって心強められる発見でした。

その後、京都市伏見で保育園を創設する決断をしたものの、多くの困難に直面した時、当時の常務だった武内勝先生に相談したら、「祈ることだ」と教えられたと述懐されていました。さらに京都府八幡市で保育園建設を計画した時、イエス団理事会在が当時の金額で700万円の資金援助を決議したことが、木村先生のイエス団の原点にあったと思います。先生の保育園事業の業績はめざましく、桃陵乳児保育園、桃陵保育園、八幡ぶどうの木保育園と京都を拠点にし、全国の保育園関係の要職に就かれました。

木村先生のお顔の広さ、ふところの深さは類を見ず、人なつっこい容姿（失礼）は人間的に大きさを感しました。牧師であり園長であったことも尊敬の念を深くしていました。私がイエス団の理事会の末席に座った時、理事長であった木村先生は、イエス団をがっちり支える存在でありました。

ただ理事会で協議される議案の中で、整っていない起草案が時々出されましたが、議場は反対・憂慮の意見が交わされても、議長として木村先生が「まあ、いろいろ問題はあがあるが、提案者の心意気を信じて認めましょう。」と締めることが多く、新米理事としてあつけにとられたことを覚えています。やがてイエス団としてガバナンスの問題、コンプライアンスの問題として大きな課題となりましたが、木村先生ご自身のイエス団の原点の体験が強く反映されていたと思います。問題を十二分に把握しつつ、木村先生の原点が賀川精神を継承する核になることを大事にしたいと考えます。

「木村量好のこと」

桃陵乳児保育園 園長 宇野 豊

以前から木村量好という人物は知ってはいましたが、私が通った学校の大先輩の一人という認識しかありませんでした。向き合って言葉を交わしたのは確か1986年ごろ、木村アサの父として、伏見の居酒屋で食事を共にした時だったと思います。「俺も食う方やけど、お前の方がよく食うなあ」と、ビール一杯で真っ赤になった顔を崩して豪快に笑っていたことを覚えています。

いろいろないきさつを経て、2005年に桃陵の一員として、そして2007年に園長となるにあたり、不安だったのが、私が以前から関わっていた差別と人権に関わる活動との兼ね合いでした。そんなためらいに、いつだったか彼から「お前がやりたいようにやったらええんや」と、これまた豪快に言い放ってくれました。

その後、園とのかかわりが深まるにつれ、この園では「反差別・人権」という“ことば”が、保育の中にしっかりと溶け込んでいるんやなど、その幅の広さに驚きましたし、個人的なためらいを持ったことを少し恥じたものです。

「心を通す」、「子どもたちひとりひとりを大切にする」、「丁寧な保育を心がける」、これは彼がよく語っていた言葉です。そして、桃陵の保育を一言で表す言葉でもあります。ただ、言うことは簡単ですが、それを実際の保育に活かすのはとても大変なことです。

彼はそんな育て方のとても難しい小さな種をまき、50数年をかけてしっかりと育て、そこから生まれた新たな種の守りを私たちに託しました。

至らないことも多いとは思いますが、さらに大きな何かを育てていく歩みをこれからも続けていきたいと思っています。そんな思いを込めて、以下に、木村量好が記した“ことば”を掲載します。彼の思いや人となりを感じていただければと思います。

「あるきはじめの保育」

桃陵乳児保育園 園長 木村量好(当時)

桃陵乳児保育園 10 周年記念文集より抜粋
(1977 年 6 月発行)

幼い頃、母が小さな桐の小箱に入っている「へその緒」を見せて「お前がお腹にいた頃これでつながっていたのだよ」と言われてひどく驚いたことがあります。外国では、そんな時、「これは、お前があるきはじめの頃の靴だよ」と子どもの自立をよるこんで記念にその靴を残すそうです。

私たちの保育園が、ひとり歩きをはじめたことを喜んでヨチヨチ歩きの中で使いふるした小さな靴をここに残します。

あるきはじめはとかく夢中で、10 年という歳月はあっという間に過ぎてしまいました。ナマ傷の絶えない厳しい状況の中で、子どもたちは恵まれてめざましい成長をとげ、今では、自分で考え、自分で工夫し、自分で創り出し、自立した人間として歩きはじめています。数えきれない多くの方々に厳しく鍛えていただいたり、また優しくたすけられたりして成長してまいりましたことを心から感謝しています。



1965 竣工式

さて、保育の場は様々な地域社会の要求の中にありながら、これまた数限りない多くの矛盾の中に放置されています。その最たるものは、保育園に入園してくる幼な子たちが、人生の

出発点で最も社会的に手厚くその発達を保証されなければならないにもかかわらず、保育制度そのものが最も個人的な、「請負い」仕事に背負わされていることです。

そうした中で私たちの園では地域の問題を担い、その要求に応えて、長時間保育をし、また危険のともなう 0 歳児保育を行い、カギツ子たちを集めて学童保育をなし、ハンディキャップを担って生きる障がい児たちに手厚いかかわりをする等々。これらはある意味で制度の上からは明らかに、はみ出した部分を担うかたちになっています。しかしながらこれらは、子どもを中心にすえた長い話し合いのくり返しの中で保育者や保護者が問題を考えつつ、気が付いてみるといつの間にか「開かれた園」の姿をたどってあるきはじめておりました。

先日、第 10 回の卒園式が分園で行われたときのことで。1,2 年前までそれほどまで伸びを示さなかった子どもたちが急に卒園前にめざましい発達をしているのに気づかされて驚きました。「おい、それ間違ってるで」「こちらに変えたほうが、ええぞう」といったやりとりが保護者の見ている前で実際にないく伸び伸びと言えるのです。子ども自身みずから規定している諸関係を正しく比較する中でそれを変えてゆく力を身につけているのです。しかもその状況に応じて実に柔軟に伸縮自在にやれているのです。子どもはまさに遊び仲間の中で発達するものだということをいまさらの如くに思い知らされました。

こうした私たちの保育園の持つ役割が保育者の労働条件の面にかんがりのしわよせとして事実のしかかっているに違いないと思います。更に精神的にも重荷になりはしないかと気づかう面があります。しかしお互に元気に働けている背後には、子どもを中心としながら保育者と保護者と地域、そして園との間に互に心を通わせ合いつつ、いと小さきものの生命を大切に、その個々の生命をかがえのけないものとしていこうという人間の合意があるからではないでしょうか。

すりへった靴の痛み具合からみて、「あるきはじめの保育」にかたよりはなかったろうか。ヨチヨチ歩きの中でも常に園で

大切にしようとしたものが伝わり貫かれていただろうかと気づかいます。人生につまずきそうになる時に「昔から一緒にはいたこの靴」の姿を見つめて生きる励ましになるようであればうれしいと思います。

今年の謝恩会(卒園式後に開催)で或る人が「この園には『桃陵ファミリー』という言葉がぴったりするようなあたたかさがある」と言ってくれて嬉しく思いました。しかし「へその緒」でつながっていたことを大事にするファミリーではなく、ひとりあるきできるようになったことを互によるこびあえる仲間でありたいと思います。

つたない「あるきはじめの保育」の足音を心はずませてきて下さい。

「園だより」

桃陵乳児保育園 園長 木村量好(当時)

2010 年 3 月発行より抜粋

今年度末で、52 年間勤めた保育の仕事から手を引くことになりました。神様の大きな支えのほか、長い間お世話になった皆様方には心からの感謝の思いでいっぱいです。

保育制度そのものが不十分で、保育の仕事は大変の一言に尽きた時代、振り返れば、生傷の絶えない中で、つらかったことが特に思い起こされます。

中でも 46 年前、公園となっていた土地が用途変更になったこともあって、地域住民から激しい反対運動を受け、仲よくすべき地域と対立して出発したのが桃陵乳児保育園のはじまりだったことはとても辛い思い出です。

また、ゼロ歳児、産休明け保育、そして長時間保育を要求される中で、子どもの安全と職員の労働条件の狭間で、相互に生傷が絶えない体験をかさねてきました。結局は、対市交渉を重ねながら、制度の改善を目指して当座を切り抜けましたが、この体験は、園と職員の自律を計るという点では大きな力となったようです。不十分な制度であったにもかかわらず、子どもには大きな事故もなく過ごすことができたことは幸いでした。



2010年2月 園内絵画展で

併せて、市の保育行政は公私間格差が大きくあって、子どもには不公平な制度でした。私たちは常に「民間魂」をもって激しく京都市の保育行政の

改善に向かって運動を展開してきました。「終わりのない闘い」でした。それは今でも、形は変わっても続けられています。

こんな闘争の積み重ねの中で少しずつ保育制度の改善が図られていきました。

まだまだ思い出すことがありますが、これぐらいにして、後の世代に委ねたいと思います。

重ねて、これまで歩んでこられましたことに心より感謝するとともに、これからの新しい体制につきましても、お支えをいただきますようお願いいたします。

本当にありがとうございました。

「吾が恩師・木村量好先生」

愛隣館研修センター 平田 義

私が大学の卒業を間近に控えた1984年の3月、当時通っていた京都教会の原忠和牧師より、イエス団の木村量好先生が会いたいと言っているとの話がありました。連絡をとり、約束の場所である、伏見区向島の愛隣館研修センターに行きました。そこには、世光教会の後宮俊夫牧師と野の百合保育園の難波俊子園長もおられました。何の話なのかよくわかっておらず、緊張の面持ちであったであろう私に対して満面の笑顔で出迎えてくださったのが木村先生でした。

まず、卒業後の進路は決まっているのかと尋ねられたので、インドに留学して地域組織の勉強がしたいと考えていると答えました。

すると木村先生はニコッと笑って、「それはエエことや。でもな、インドで勉強する前に地域というものが何なのかを経験してから留学の方が学びは深くなるぞ。まずは、ここ向島で地域のことに取り組んでみてからインドに行ったらどうや。この愛隣館研修センターは、君がやりたいと思っている地域の課題に取り組むために建てた施設なんや。働き人は君一人やから、すべて自分の好きなようにやってみたらエエ。どうや？」と畳みかけられました。そうおっしゃった時の眼鏡の奥の眼光は鋭く、断り切れない雰囲気を感じ出していましたので、おもわず「わかりました。」と答えてしまい、インドに留学できないまま35年の月日が経過しています。

その後、前任者の永田昇三さんと1日だけの引き継ぎがあり、愛隣館研修センターでの働きが始まりました。月に1度、木村先生、後宮先生、難波先生と運営会議をもち、活動報告や今後の方針などの話し合いを行っていました。その会議の中でも、自分のやりたい活動が続いている私に対して、決して批判することなく、「ええぞ、ええぞ」と豪快に笑いながら「どんどんやってみたらエエ」と後押ししてくれていました。

ある時、「愛隣館研修センターニュース」にいわゆる「賀川問題」の本の紹介を掲載しました。すると当時の法人の常務理事から「君はイエス団の一員であるにもかかわらず、賀川批判をするのか。そういうことは、やるべきではない」と叱責されたことがありました。その事を木村先生にお伝えしたところ、「気にすることはない。大事な問題でもあるんだから、自分のやりたいようにやったらエエ。あとは、私が責任を持つから。」とおっしゃってくださいました。徳島で賀川豊彦との出会いからご自身の生き方が感化され、法人の理事を務める方であるにも関わらず、そのようにおっしゃった木村先生の懐の深さに感動を覚えたのでした。

豪放磊落な木村先生ですが、実はとてもきめ細やかな配慮をしてくださる一面もありました。障がいのある方とその家族が安心して暮らせるためのセンターの建設を計画した時です。自己資金もなくどのようにその計画を前に進めていけるのか途方に暮れていました。木村先生はご自身のこれまで培ってこられた人脈を駆使して、募金委員会を立ち上げる尽力をしてくださり、行政との交渉にも足を運んでくれました。新しいことにチャレンジしていく開拓的な精神で、ないものを形あるものにしていくための道筋を教えてもらいました。様々な障壁があり挫けて諦めてしまいそうになる時にも、信念をもってやり続ければ必ず道が開かれるということを実証してくださいました。

今の向島での愛隣館での働きは、人との繋がりを大切にしてくだされた木村先生の後押しがなければ成立しなかったと思っています。

「人を大切にする。いのちを大切にする」これを貫いてこられた先生の生き様を学ばせてもらいました。

これからも私たちのことを「ええぞ、ええぞ」と豪快に笑い飛ばしながら、天国から見守り続けてください。共に過ごさせていただいた貴重な時間、感謝です。

木村量好（きむらかずよし）プロフィール

- ・ 1932年4月29日 徳島県に生まれる。
- ・ 中学生のころ、徳島市小松島であった賀川豊彦の伝道集会でキリスト教に導かれ、ホーリネス教会の本多弘慈牧師から受洗。その後、徳島市内で社会福祉界の開拓的リーダーである小川秀一牧師に大きく影響を受ける。
- ・ 1958年3月 同志社大学大学院、組織神学専攻、修士課程を修了。
- ・ 1958年4月 大阪四貫島友隣館主事、天使保育園及び四貫島教会伝道師に就任。6年間小川秀一牧師のもと、社会福祉の基礎と牧会の基礎を学ぶ。
- ・ 1964年 日本基督教団世光教会担任教師に就任。京都伏見の地に桃陵友愛館（乳児保育・学童保育・隣保事業）を設立。
- ・ 1966年 八幡伝道所兼務主任教師に就任。
- ・ 1966年 京都市保育園連盟理事に就任。以降、全国私立保育園連盟副会長、京都市保育園連盟副理事長を歴任。
- ・ 1973年 桃陵保育園設立。
- ・ 1975年4月 ぶどうの木保育園設立。
- ・ 1979年 京都向島で、愛隣館研修センター設立。
- ・ 1980年 京都市保育園連盟伏見園長会会長に就任。
- ・ 1991年 財団法人日本クリスチャンアカデミー理事に就任。
- ・ 1998年 日本キリスト教保育所同盟理事長に就任。
- ・ 2004年 社会福祉法人・学校法人イエス団第5代理事長に就任
- ・ 2009年3月 桃陵乳児保育園園長を退任。
- 2018年10月31日 召天

木村先生と絵画

木村先生は型にはまらない伸び伸びとした子どもの絵が好きでした。ご自身もたくさん作品を描き、遺されました。

1958年大阪・四貫島での働きは「地域活動に根ざした伝道」と言う人生の指針が方向づけられたと先生は言われます。

『「英語、絵画、ダンスなど、思いつくままに若者が求めていることをやってみました。今と違って身近な所に娯楽がない時代でしたから、そういう教室を開くことは、教会に若者を惹きつけるのに有効だったのです」絵画が得意だった木村先生は、教室で教えるほかに、毎週の週報の表紙を描き、絵具などの高価な画材費は、小川秀一先生が出してくださったそうです。』（「イエス団報11号」より）

本号の表紙はご家族に提供いただいた作品を掲載いたしました。木村先生は「ハゲコウ」の絵をよく描かれていました。前夜式や告別式にも飾られていた絵で印象深い作品です。ハゲコウについて「貧しさ 弱さを四周にさらして立ちつくすハゲコウを描きました。それをつつむ空間（永遠）があることを指し示したかったのです。」（「賀川豊彦とそのボランティア」竹内勝口述刊行委員会より）

先生のハゲコウに込めた思いの一端が語られています。あらためて一つひとつの作品から先生のメッセージを感じていただければ幸いです。



右上より時計回りに 題名 年代	
「礼拝堂」	不明
「埋葬」	不明
「埋葬」	1960年代後半
「ハゲコウ」	不明
「クリスマス」	1969年
「埋葬」	1995年
「クリスマス」	不明
「ハゲコウ」	不明

掲載する絵の無断複製など、著作権を侵害する行為はご遠慮ください。